

## ソーシャルワークにおける対人援助の思想に関する考察

### － ソーシャルワークの価値とキリスト教思想の視点より －

○ 西九州大学 滝口 真 (1862)

キーワード 社会福祉思想、ソーシャルワーク、キリスト教

#### 1. 研究目的

高田真治(2001)は社会福祉の価値研究について「価値(哲学)は、専門職の専門性を支える「こころ」(compassion)としてだけではなく、社会づくりの目標を示すことが求められる。ノーマライゼーションやメインストリーミング、共生など、社会福祉が目指す社会の鍵概念が示されているが、それに至る道は遠し。しかし実践の基盤である社会のありようについての将来展望をもつことが重要であろう。」と示唆している。加えて、「社会福祉実践についての今までの研究を説明するために、横軸にアートと科学、縦軸に知識と価値をとると、アートと知識で示される象限<A>を中心にして、実践の直接の要素である方法(技法)を論じ、それを科学的、理論的に支える要件として理論と価値を含めることになった。したがって今後の課題は、科学と価値で示される象限<B>の検討、すなわち『価値の科学化』である。これを中心にして、それに必要な知識やアートへと議論を展開していくことが必要ではないか。今日の社会が政治や経済の理論によって、ある方向に動かされている状況を見ると、これを社会福祉の観点から評価し、それに対するありようを社会福祉の価値に基づいて示す必要があると言えよう。」として社会福祉研究における「価値の科学化」の必要性を示唆している。また、平塚良子(2008)は、ソーシャルワークで重視される対象者への視点・対象認識は、ソーシャルワーカー自身の価値や目的によって形成される傾向にあるとして、価値・目的と視点・対象認識の領域は合わせ鏡の関係に位置すると構造化を試みている。いわば両者が対面の位置関係においてソーシャルワーク機能が成立すると主張している。これらの指摘は、ソーシャルワーク実践におけるソーシャルワーカーの価値が実践に反映することを示唆していることから、欧米で発達してきたソーシャルワークの歴史的及び文化的背景の一つとしてキリスト教思想に着眼し、その対人援助の意義及び意味について若干の考察を試みることを目的とする。

#### 2. 研究の視点および方法

わが国の社会福祉近代史において活躍した、留岡幸助、石井十次、山室軍平、糸賀一雄、賀川豊彦、沢田美喜、生江孝之らは、キリスト者としてその人生そのものを福祉の世界に捧げた。これら先達は共通してイエス・キリストを信仰するソーシャルワーカーであり、その福祉行動の根底には、「聖書」の思想やメッセージが生き続けたといえる。

これら先達が福祉の世界に人生を捧げる契機となったものが「聖書」である。門脇聖子(2002)は、「キリスト教社会福祉の土台は聖書である」と示しており、現代も多くのソーシャルワーカーら(阿部志郎, 小森 宏, 西宮幸治; 1998)が心に留め、人生の示唆を得た聖句が、「はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」(マタイ 25:40)であった。キリスト教社会福祉を示すマタイの聖句において先行研究及びコメントリーを通して考察を試みる。

### 3. 倫理的配慮

先行研究及びコメントリー等を通して考察を試みる。また、文献引用においても当時の歴史的背景に立ち返り原文を適正に引用しつつ考察を行う。

### 4. 研究結果

高森敬久(1998)は、「キリスト教信仰と社会福祉実践」について、『キリスト教信仰』という神学的な検討を含む課題と『社会福祉実践』という社会科学の枠組みによって規定される二つの概念を含んでいる」と指摘している。この理解について高森は、聖書的信仰においては信仰と行為は一体のものとして把握されていることを理由に、「社会福祉実践」を「信仰の行為」或いは「神の恵みの果実」として意味づけ、キリスト教信仰との関わりの中で社会福祉実践を考察している。さらに、高森敬久(2000)は、「はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」(マタイ 25:40)には、キリスト教社会福祉における主体と客体が示されており、主体は「その最も小さな者、それはイエスご自身であり、客体もまた、わたしの兄弟であるこの最も小さく苦しみの中に置かれている人々である」としている。つまり、社会福祉における利用者と援助者というこの二つの存在を聖書は別のものとして扱っておらず、ここに「キリスト教社会福祉の学としての独自性を見いだすことができる」と指摘している。

### 5. 考察

マタイ 25:40 については日本語訳では主語が略されているが、英語では、貴方(弟子)が明示されており、これが本聖句の主語(主体)と理解される。よって、客体は「この最も小さい者のひとり」と理解できることから、高森の主張する「主体は『その最も小さな者、それはイエスご自身であり、客体もまた、わたしの兄弟であるこの最も小さく苦しみの中に置かれている人々である』」には解釈としての混乱が確認できると考えられる。

コメントリーからは、「援助者たるものは自分を低くし、(利用者)に仕える者となることが求められる」とも解釈でき、本聖句は、当時の困窮のなかにあっても信仰によって立つ伝道者のように、利用者に対して謙虚で献身的に援助にあたるよう諭す援助者自身への自己覚知を促進する書としての性質を有するとも考えられよう。